

健康教育・ヘルスプロモーション論文の 質向上のための査読を求めて —論文査読セミナー ディスカッションの記録—

甲斐 裕子^{*1}・小熊 祐子^{*2}

キーワード：査読，原著論文，実践報告，編集委員会

I はじめに

2012年1月，日本健康教育学会主催（編集委員会企画）の論文査読セミナーが開催された（表1，写真1・2）。セミナーの目的は，日本健康教育学会誌・神馬編集委員長（以下，委員長）によって，以下のように説明された。

「日本健康教育学会には専門領域の異なる研究者や実践者が集まっている。専門分野が異なるため，査読方法は必ずしも統一されておらず，査読のあり方について議論になりやすい。また，査読の質を高めるために，欧米では査読のトレーニングを受ける機会があるが，日本ではそのような機会は稀であり，各研究者の経験にもとづいて査読を行う傾向がある。そこで本学会誌における査読のあり方について学び議論するために本セミナーを企画した」

本報告では，セミナー参加者のみならず非参加会員ともセミナー内容を共有するために，セミナーの概要と主要な議論の中身を紹介したい。な

お，本報告では情報を整理するために，各コメントの内容を要約したり，言葉を補ったりもした。また，敬称や尊敬表現は省略した。

II ディスカッション

まず第1部では「公衆衛生分野の学術誌における査読の質向上のポイント」として講演が行われ，講演内容に関するディスカッションがなされた。講演内容については別報告に譲る¹⁾。本報告では講師への質疑応答に基づくディスカッションの中身をボックス記事として紹介したい（ボックス記事1）。

次いで第2部では，司会の赤松副編集委員長が，第2部の企画意図について冒頭に，以下のように説明した。

「健康教育・ヘルスプロモーションの向上のために本学会では実践報告にも力を入れている。第2部ではまず実践報告の事例を紹介し，特に実践報告の査読のあり方について議論したい」

続いて村山編集委員より日本健康教育学会誌に掲載された小学生を対象とした栄養教育の介入に関する実践報告²⁾を取り上げ，他誌に投稿した際の査読の過程などが紹介された。さらに一つの問題提起がなされた。

「実践報告はどんな論文が良くて採択されやすい論文かという基準が現在はない。論文区分に合った査読が必要であり，それについて投稿者・査読

^{*1} 財団法人明治安田厚生事業団 体力医学研究所

^{*2} 慶應義塾大学スポーツ医学研究センター・大学院健康マネジメント研究科

連絡先：甲斐裕子

住所：〒192-0001 東京都八王子市戸吹町150

財団法人明治安田厚生事業団 体力医学研究所

TEL：042-691-1163 FAX：042-691-5559

E-mail：y-kai@my-zaidan.or.jp

表1 セミナー概要

タイトル	日本健康教育学会主催 論文査読セミナー —健康教育・ヘルスプロモーション論文の質向上のために—
日時・会場	2012年1月21日（土）13：30～16：30 女子栄養大学駒込キャンパス小講堂
プログラム	第1部 講義「公衆衛生分野の学術誌における査読の質向上のポイント」 講 師 中村好一（自治医科大学） 座 長 神馬征峰（東京大学，編集委員長） 第2部 事例検討・議論 司 会 赤松利恵（お茶の水女子大学，副編集委員長） 事例紹介 村山信子（新潟医療福祉大学，編集委員） コメンテーター 朝倉隆司（東京学芸大学，編集委員） 高倉 実（琉球大学，編集委員） 春山康夫（獨協医科大学，編集委員）
総合司会	武見ゆかり（女子栄養大学，総務担当理事）
セミナー参加者数	90名（正会員 52名，非会員 11名，学生会員 13名，学生 14名）



写真1 第1部 講義



写真2 会場

ボックス記事1

1. 査読者の選定方法

Q：査読者として適切ではない人が査読者になっている可能性があるのではないかな？

A：国内雑誌が共通して抱える査読制度の問題点であり，海外の雑誌のように投稿者が査読者を指名するシステムの導入を考える必要があるかもしれない。

2. 投稿論文の雑誌への適合性の判定者

Q：投稿論文が雑誌に適しているのか判断するのは，誰の役割なのか？

A：論文の雑誌への適合性を決めるのは編集委員会。「リサーチクエスチョン」が妥当であり，それに適切に答える論文になっているかどうかを判断するのが査読者の役割である。

3. 教育的査読のコメント量の目安

Q：教育的な査読になった場合はコメントの量が多くなりがち。コメント量について経験的な目安があるかな？

A：投稿者が大学院生などである場合，論文作成に関する教育は査読者ではなく指導教員の役割。また，独立した研究者が投稿者ならば基本的に本人の責任。コメント量に特に目安はない。また，内容が良くて投稿者が真剣で手間をかける価値があると判断されたならば，引き受けたら最後まで付き合う。

者間の認識の共有が必要ではないか。」

これに対して取り上げられた実践報告の共同研究者からのコメントがあった。

「この栄養教育に関する事例研究の内容は他の現場でも実践できる方法だと考えていたのでぜひ学術誌に発表したかった。ただし、投稿先をどこにすべきか迷った。査読の方針については、雑誌それぞれがどう考えるかということが大切ではないか。」

その後、第1部講師（以下、講師）、編集委員3名のコメンテーターを加え、フロア全体でディスカッションが行われた。主なディスカッションのポイントは、以下の7点であった。ディスカッションは、実践報告に関する議論（ポイント1～3）から始まり、査読全体に関わる議論（ポイント4～7）に発展した。

1. 実践報告の意義

まず講師より、臨床の分野では実践報告は症例報告にあたるという認識が示された。そして、症例報告は「珍しい患者を診ました」だけではなく、そこから導き出されること（原因や治療法に迫る）があるため、非常に重要と位置づけられているとの話があった。健康教育学会における実践報告も同様の意義があるとし、実践報告を積極的に取り上げている健康教育学会の姿勢を評価した上で、今後もこの方向性に期待すると述べた。フロアからも「現場には素晴らしい健康教育の実践があり、それを拾い上げて積み重ねていくことが健康教育学会の役目ではないか」という意見が出た。同様に、「無作為化比較試験（RCT）ではない介入研究は、臨床系の雑誌には掲載されにくく、公衆衛生的な活動を広く周知するためにも健康教育学会の実践報告は重要」という発言もあった。RCTに関連して、委員長は「RCTが得意な分野とそうではない分野（ヘルスプロモーション等）がある。また、ある国でRCTの効果がなかったとしても、国が変わると全く効果がなかったという場合もあり、RCTは万能ではない。むしろ実践報告から新規性が出るのではないかと指摘した。さ

らに、海外の一流雑誌でもフィールドレポート（Field report や World report など）を大事にしようという国際的な流れがあると説明した。

2. 実践報告と原著の違い

フロアから「実践報告と原著の違いがわかりにくいことがあり悩ましい。査読者として実践報告に（原著のように）どこまで一般化を求めているかわからない。学会の方針を知りたい」という質問があった。委員長は「これまでは原著だと採択できないので、エビデンスのレベルを下げて実践報告にという考えがあった。今後はそうではなく“レベルの高い実践報告”を作り上げていくという方向に変えようとしている。RCTでも完全な一般化は難しい。実践研究の場合はさらに限界が多いかもしれないが、制限の中でこれだけは言えるという部分が明確化できれば、科学論文として意味がある」と回答した。加えて、原著との違いを明確にするために、抄録や論文構成の変更を編集委員会で検討していることが、司会者から報告された。

3. 実践報告の査読ポイント

原著のイメージに慣れていることもあり、実践報告の評価ポイントが絞りにくく、査読が難しいという意見が複数あった。この点について、コメンテーターより「実践報告に求められるのは、プログラムの内容と実践プロセスではないか」「この報告が何に貢献するのか明らかにすることが重要ではないか」という提案があった。また、フロアからも同様に、「プロセスを重視して、別の現場で模倣して実践できるというのが実践報告ではないか。そのエッセンスを抽出して説明するのが投稿者の役割である」との発言があった。さらに「雑誌が大事にしていることを査読者は理解したうえで査読する必要がある。学会として実践報告に何を求めているか、査読者に伝えていかないとけないのではないかと」との意見があった。この点については、司会者が「査読要領を参考に査読していただいているが、実践報告についてより詳細な査読要領が必要かもしれない」とコメントした。

4. 査読の判断基準

セミナーに先立ち、編集委員内で実践報告に限らず査読に関する質問や悩みを募集したところ、最も多かったのが査読の判断基準に関することであった。たとえば、大幅な修正が必要と判断された場合、すぐにリジェクトするのか、丁寧にコメントを返す（つまり教育的査読を行う）のか迷うなどの意見が寄せられた。フロアからも「論文をできるだけ採択したいのか、競争的にリジェクトして厳選したいのか、学会としての考えを聞かせて欲しい」という質問があった。この質問には、委員長が「現段階では投稿論文数が十分でなく、なるべく採択の方向にならざるを得ない。今後投稿数が増えてくれば、厳選することもできる」と回答した。また、講師は「私は、大幅な修正をしても本質が変わらなければ修正を求める。ただし本質が変わるならリジェクトして、視点を変えての再投稿を勧める」と自身の基準を説明した。その上で、「編集委員会は、雑誌の存続を考えなければならない。今はいいものにしていく努力の時期ではないか」と続けた。この点について司会者より「以前は徴収していた投稿料を廃止したため、再投稿を勧めやすくなった」と、より良い雑誌になるよう、規程を改良していることが紹介された。

5. 教育的査読

ディスカッションの中で「教育的（もしくは指導的）査読」という言葉がたびたび出てきた。これは、論文作成に不慣れな投稿者も多いため、論文をより良くするよう査読者が丁寧にコメントすることを指している。特に、実践報告では教育的査読をすることで、論文としてまとまる報告が増えるのではないかと司会からコメントがあった。この教育的査読について、「学生指導のように事細かに指摘するのではなく、明らかにおかしい部分を取り上げて、それを参考に修正してもらう方法が良いのではないか」との意見があった。さらに、細かい指摘になりがちな文章の“読みやすさ”については、査読者や編集委員ではなく専門業者に任せてはという意見が複数挙がった。委員長は

「論文は内容も大切だが、今は読みやすさも大切な時代。海外雑誌では読みにくいだけで、リジェクトになる場合もある。読者に恥ずかしくない“製品”を届ける最終的な責任は編集委員長にある」と思い、今は暫定的に自分で読みやすさをチェックしている。将来的には予算がつけば、システム化していきたい」とコメントした。また総合司会者からも、「外部 editor への依頼は現時点では財政的に難しいが、将来的にはそのように発展させたい」との追加発言があった。

6. 論文の質の向上

査読前に論文の質を上げるプロセスとして、コメンテーターから「論文に不慣れな投稿者を支援するシステムがあっても良いのではないか」という提案があった。また、委員長からも、先の実践報告での議論の中で、実践を行っている人をサポートする仕組みを何とかしたいとの発言があった。これらを受けて、講師より「日本疫学会（以下、疫学会）では疫学研究を支援している。申請すれば評議員クラスの研究者とマッチングして共同研究として進めるというシステムがある。研究者にとっても論文の完成は業績になるのでメリットはある。健康教育学会でも同様の支援を組織的に行ってはどうか」と情報提供と提案がなされた。

7. 査読の質の向上と編集委員会の役割

編集委員からのコメントに「査読が適切であったかフィードバックをもらいたい」という意見があった。このような査読の質の向上に関して、講師より「疫学会では自分の査読と編集委員会からのコメントを比較出来るようにしていた。編集委員会から査読者に意見することもあった。それがトレーニングになっているかもしれない。また、疫学会では優秀査読者賞をつくっている。査読を承諾したか、期限内に返したかも考慮ポイントだった」とのコメントがあった。また、コメンテーターからも「ウェブ上に査読過程を公開している雑誌もある。査読過程に誰かの目が入るシステムが必要ではないか」、「今後、健康教育学会でも査読者のコメントを編集委員が修正するよう検

討した方が良いかもしれない」などの意見が出された。最後に司会者から「担当編集委員のあり方を見直し、編集委員会での共通認識をつくっていききたい。査読の質の向上については引き続き議論したいので、皆さんからも意見を寄せて欲しい」とのコメントがあった。

Ⅲ セミナーの終わりに

セミナーの終わりに、委員長より「論文や査読の質の向上について具体的なアイデアをいただいた。出来るところから実践していきたい」と挨拶があった。講師は「査読をテーマに活発な議論があり、健康教育学会の未来は明るい。いつか実践報告が学位論文に認められる日も近いのではないかと学会への期待を述べた。最後に、前編集委員長でもある高橋理事が「皆で良くしていこうというのが本学会の良いところである。自分の意見^{3,4)}も取り上げてもらい、寛容な学会であることに感謝している。投稿しないという選択は簡単であるが、それでは自分の活動の場が失われる。学会を育てていくということも大切である。まずは論文を投稿してほしい」と挨拶し、閉会となった。

Ⅳ ま と め

本セミナーには90名という数多くの参加者が集まった。これは査読への関心の高さを表している。言い換えると査読について悩んでいる研究者が多いということでもあろう。セミナー全体を通して、査読の視点や編集委員会の役割など、整理

が進んだように感じた。特に、実践報告の必要性や重要性については、概ねコンセンサスが得られたのではないだろうか。今後は、編集委員会を中心に、実践報告の査読のポイントや担当編集委員の役割などについて共通認識をつくり、明文化していく作業が必要である。なお、現在、編集委員会では投稿規程の他、査読要領の改訂を進めており、健康教育学会のホームページにて公開予定である。

査読は、分野や立場などにより違いがあるため、統一したマニュアルをつくるのは難しいのかもしれない。そうである以上、大切なのは学び続けることと議論し続けることである。それが公表される論文の質の向上につながり、ひいては健康教育・ヘルスプロモーションの発展に寄与するのではないだろうか。

文 献

- 1) 中村好一. 公衆衛生分野の学術誌における査読のあり方：査読に対するひとつの私見. 日健教誌 2012; 20: 131-137.
- 2) 嶋田雅子, 小林陽子, 坂口寄子, 他. 小学6年生における「弁当箱ダイエット法」を用いたランチバイキング学習前後の食物選択の改善. 日健教誌 2008; 16: 94-109.
- 3) 高橋浩之. 日本健康教育学会誌の「査読」を査読する. 日健教誌 2011; 19: 353-354.
- 4) 神馬征峰. 日本健康教育学会誌の査読：理想と現実のはざま. 日健教誌 2011; 19: 354-355.

(受付 2012.4.9.; 受理 2012.4.15.)